

自死遺族たちの語りにくさ

——当事者と被害者——

亜細亜大学 有末賢

「被害者になる」というテーマ部会において、「自死遺族たち」は二重の意味を背負っている。第一には、自殺念慮者（多くの場合、うつ病患者であったりする）や自殺未遂者などを抱える家族として苦悩しており、それが自死に至ってしまうと、今度は「自死遺族」という被害者に名を連ねる。身近なものたちを「自殺に追いやった」という自責の念が消えず、つらい思いを人に言えず苦しんでいる。

自死遺族たちの声は、確かにか細いし、伝わりにくい。それは、身内や近しい人を自殺で失うという経験が、非常に衝撃的であると同時に、「声高に叫べない」「感情を表現しにくい」「人に言ってはならない」という規制が当事者たちに付いているからであろう。時間を少しだけ巻き戻せば、自死した本人こそが「当事者」であり、そのことも重要な問題である。「うつ病」を抱えていたり、「自殺未遂」経験者であったり、希死念慮が高く、周囲の家族に「死にたい」と漏らしている場合も多い。自殺者本人と一番身近にしながら、「自殺を食い止めることができなかった」という自責の念は、自死遺族たちを沈黙させる大きな要因である。

オーラル・ヒストリーは、「語られる」ことから出発しているが、「語られること」と「語られないこと」とは、おそらく連続線をなしており、その間には、さまざまな段階が存在している、と考えられる。第一に、「語りえること」というカテゴリーで括られる、「語り」についてのストーリーと構築性の問題が存在している。ライフストーリー論で展開されている「対話的構築主義」や「物語論」などは、すべて「語りえること」にかかわっている。第二に、本報告の主題でもある「語りにくいこと」が存在している。「語りにくい」と言うことは、誰にでも「語られる」ことではないし、すぐに「語り出されること」でもない。なかなか「語れないこと」であり、場合によっては、インタビューの最後まで「語られない」かもしれないが、調査者—被調査者関係の機微によっては、「語りにくい」ながら、語られることもある。今回は、調査者—被調査者関係の機微ではなく、当事者である「自死遺族」の「語りにくいこと」について、筆者自身の言葉で語ってみようと思う。第三に、被調査者が「語らないこと」のレベルも、実はいろいろと存在している。オーラル・ヒストリーやライフストーリーの調査に対する「拒否」と言う態度もあるだろうし、秘密にしたい、沈黙でしか対応できないこともあるだろう。第四に、「語りえないこと」という普遍的な次元も存在している。身近な人の死に直面したとき、あるいは、その死が自殺と言う衝撃的なものであった時、人は何も語れないし、「語りえない」ことが当然である。また、「語りえないこと」というのは、悲しみの場合でも、衝撃の場合でも、誰にでも起こることであり、その意味で「普遍的」であり、「本質的」なことの場合も多い。

この「語り」と「沈黙」の関係性について、最後にもう一度考えてみたい。「いのち」や「死」の問題を考えた時に、「祈り」という言葉で示される「沈黙」の意味を深く考えてみることとつながっているのではないだろうか。死や死者との「和解」(reconciliation)の問題は、語りと語りえないこととの間に存在しているのであろう。